

子ども論の現状と課題

－「まなざし」「子どもの文化」を中心として－

Present situation and problems of child study: Focusing on “Regard” and “Children’s Culture”

山本清洋

Kiyohiro YAMAMOTO

キーワード：Child study. Child’s culture. Child. Regard to child.

日本では、1964年の東京オリンピック以降に子どもの生活領域に組織的スポーツが急激に侵入しはじめたが、1994年で小学4年生以上の子どもの約50%が学校外のスポーツ活動に参加し、週に2日以上練習に約80%の者が通っている¹⁾。更に、これらのスポーツのほとんどが全国的に組織され、日々の練習は全国大会へと繋がっている。その結果、これらのスポーツは競技性を強め勝利志向の強い価値観が支配している。また、子どもは公教育のもとでスポーツを学習しているが、学校でのスポーツも高学年になるにつれて組織的スポーツへと変容していて、構造的には学校外のスポーツと同じ特性を持っている。このような現状は、換言すれば、スポーツが子どもの生活や子ども自身にとって質的にも量的にも看過できない意味と位置を持っていることを示し、現象的にはスポーツは子どもの文化として存在していることを表す。

さて、当然のことながら、子どもスポーツの量的な拡大、質的な変容に関する研究も多く行われてきている。日本では、勝利至上的な特性、過度な練習と身体損傷、スポーツでのバーンアウト現象、過社会化現象が取り上げられ、現状のスポーツ活動への批判的な論調がなされている²⁾。また、北米では、組織的スポーツが子どもの特性に相応しいか否かを巡る論争が1970年代以降からなされているが、結論を見出すにはいたっていない。研究の全体の論調は勝利志向的な価値に支配された大人の論理による過社会化を批判するながらにあるが、その批判は現実的には機能していない³⁾。むしろ、上述したように、大人と子どもが同じプレイヤーとして競技する大人と子どもの境

界がないスポーツへ子どもが参与することを社会が受け入れている状況にある。

今日までの研究を概観するとき決定的に欠落しているのは、子どもスポーツの指標を明確にする視点や子どもスポーツの主体である子どもへの視点がないということである。換言すれば、「子ども文化としてのスポーツ」がどのような構造的特性をもち、いかなる価値を包摂する必要があるかを問うことや子どもスポーツへ参与する子どもの存在への視点がないということである。子どもスポーツを批判的にとらえた後には、それでは子どもスポーツがいかなる価値を包摂することで子どもの存在が子どもとして保証されるのかを問うことが必要となる。そのためにはスポーツへ参与する子どもや子どもスポーツを問い返す「まなざし」を明確にする必要がある。

子ども文化という用語が子ども研究の領域に存在するということは、子ども文化がその概念を規定されていることを表す。子どもにとり欠くことの出来ない文化の有り様や要素が見出せば「子ども文化としてのスポーツ」の理論構成が可能になり、子どもスポーツの理論的な整備が可能となる。また、大人が子どもの存在をいかなる「まなざし」から見るかによって、子どもスポーツの質や内容も大きく変容するものである。近代以降、子どもへの「まなざし」の変容により、それまでに見えなかった子どもの存在が社会文化的存在として出現し、子ども文化もその固有な特性をもつことが暴かれつつある。

ここでは、1970年以降の子ども論の中から、特に本章の問題意識に関連のあるものを対象として、主に、子どもへの「まなざし」の変容、子ど

もを認識する方法、文化の捉え方等について、1970年代、1980年代、そして1990年以降の3期に分けて概観し、最後に何が課題として残されているのかを検討する。

1 本章で使用する用語の規定—「まなざし」という用語の検討

子ども論の歴史的概観を本章の目的にそって展開するうえで、「まなざし」「子ども観」「子どもの像」「現実の子ども」等の用語を規定する必要がある。子どもを語る用語として「まなざし」が用いられたのは、F. アリエスの「<子供>の誕生」の初版時期の1960年が最初であろう。その後、1970年に英訳され、1983年に邦訳された。邦訳の「<子供>の誕生」の第一部のテーマが「子供期へのまなざし」となっている。日本では1970年代にすでにF. アリエスの研究がなされているが、多くの人が子どもを語る中で「まなざし」という用語を用いたのは邦訳がなされた1983年以降と考えてよい。さて、F. アリエスの「まなざし」の意味は、彼自身が17世紀以降から子どもが大人社会から「学校化」により隔離されることに触れる中で、「この隔離は、家庭内での意識の変化をとまなっていないなら、現実のうちで可能であったはずはなかろう」(F. アリエス, 邦訳, p. 3, 1983)と述べる箇所を探れる。「家庭の意識の変化」は、社会での子どもと大人の関係についての親の意識が変容してきたことを意味している。これらの意識の変容をミクロな資料とマクロな社会構造の視点から明らかにする彼の手法からすれば、「まなざし」という用語は、社会や大人が持つ子どもへの視線であり、見方であると言える。F. アリエスの方法論は1970年代に日本でも検討された経緯はあるが、「まなざし」の用語を子ども論に採用したのは1980年に入ってからの本田和子が最初である。以下、「異文化としての子ども」(本田和子, 1982)にその用法を探ってみる。

- ① F. アリエスの方法論を紹介するなかで、「幅広い資料を駆使しながら、人々のまなざしの前に『子ども』が浮上し、『子ども期』とい

う固有の時期が特定されていくメカニズムを丹念に掘り起こしたのであった」(本田, 1982, p. 16)。

- ② 近代でのF. アリエスの指摘する「子ども期」の出現以降、「ロマン派の詩人による『子どもの発見』やルソーによる『自然人の仮説』がつづいている……。

しかし、20世紀とともに、子どものイメージは大きな転換期を迫られる。転換を促したのは、言うまでもなく、ウイーン在住の一人の医師フロイトであった。(本田, 1982, p. 16)

- ③ 現代は、「発達」というフィルターを通してしか子どもを捉えることが出来なくなったのである。しかし、いま、子どもに対するそのような「まなざし」に向けて、鋭いメスが突きつけられている。よく分かっているはずの子どもたちがにわかに姿を消していき、合理的な「子ども観」は急速にかげりを帯び始めた。(本田, 前掲書, p. 18)。

- ④ 子どもへのまなざしが規範から逃れ、自由を取り戻す、そのとき、私どもの前に彼等の他者が浮かび上がる。(本田, 前掲書, p. 18)。

以上の用法のうち、①「人々のまなざしの前に」の「まなざし」はその社会の人々が子どもへ寄せるこれまでとは異なる関心であり、②の「子どものイメージ」は、社会が子どもを描いた心象、③の「『発達』というフィルターを通して」は子どもを認識する枠組みを、そして④の「子どもへのまなざしが規範からのがれ」も、その社会での旧来と異なる子どもを認識する枠組みを表すとみてよい。

広田(広田, 1998)は、今日の子どもの関する言説を総括するなかで、「まなざし」という用語を用いず、「子どもの現在をどうみるか」「子どもをとらえる視点」に見られるように、「見る」「視点」という用語を用いている。更に、教育社会学からの子ども研究の枠組みを提示しているが、そ

のなかには「社会における子どもイメージ」「大人の関心・視線」という用語がみられる。上述した本田の「まなざし」ないし、「まなざし」に類似する用語と比較する時に、広田が「まなざし」という用語を使用しないでいる理由はともかく、用いている用語は本田の「まなざし」とほぼ同じ意味合いで使用されていると推察される。

子どもが客観的な存在としてアプリオリに現存しないという見方は、両者に共通するところであるが、社会や大人との関係性において存在する子どもを規定する際の言葉に一定の原則がみられないことは明らかである。ただ、明確なことは、社会・大人との関係性において存在する子どもをあたらしく規定しようとする社会・大人の子どもの関心や視線が「まなざし」であり、その「まなざし」に基づいて子どもを認識する枠組みの理論的内容が本田の「異文化」や門脇の「異界」（門脇 1992）であると整理できる。更に、このような理論的枠組みにより形成されたものが「子ども観」や「子ども像」と規定できる。「子どものイメージ」は「まなざし」と「子ども観」「子ども像」の中間に位置させることができる。本論では、「まなざし」という用語を使用する際には、日本では特に1980年以降この用語により、子ども世界の豊かな解釈を開く契機を作り出したという意味を強調するためにカッコ付きで「まなざし」として表記する。

2 1970年代の特性

1970年代の子ども論として、『子どもの発達と現代社会』（大田、岡本他編 1979）、『現代子ども論』（深谷昌志、深谷和子著 1975）、『子どもの遊び空間』（藤本著 1974）、『子ども達の現在』（斎藤著 1975）を中心に検討する。

大田は近代教育の成立以降、今日までに教育のなかに「発達」の概念が定着する過程を概略し、この時期の教育を取り巻く大衆文化、マスコミを含む文化状況を近代の人間教育の原理から厳しく批判する。子どもの教育の理念として、子ども一人一人の内面からの事物認識の発達や自らの内面から選りながら人間的知覚や感覚を獲得する必要性を主張し、心理的な発達段階に応じた指導の重

要性を述べる。深谷等は、子どもの生活全般への意識調査を実施し、子どもの意識の現状が危機的要素を孕んでいることを指摘した後に、これら危機的状況は、学校成績以上に、体力の充実、集団生活への適応、創造性の開発などを発達課題として位置づかせることで克服できる可能性があるとする（深谷等 1975 pp.152）。藤本は、高度成長社会の歪が子どもの遊び環境を破壊しつつあり、子どもの成長・発達を損なう状況にあることを実証的に明らかにする。この三氏の共通項は明らかに、「子どもの有意義な成長・発達」であることは一目瞭然である。深谷の「発達課題として位置づける」、更に、大田の「心理的な発達に応じた指導」という言説は、子どもに向く「まなざし」が「発達」と「教育」であることを示す。特に、大田は「アリエスが指摘した大人の縮図としての肖像画はうちくだかれることになったのである」（大田、岡本他編 1979 p.9）と述べ、ルソーをはじめとする近代教育思想に1970年代の混迷しつつある子どもの教育の克服を求めている。アリエスの「まなざし」を、異なる視点から（例えば、本田のように）捉えていけば、子どもへの「まなざし」は違うものとなっていたであろう。本田が子ども研究の100年を振りかえるなかで、20世紀の一つの側面は科学の時代である。この科学主義が、学校や子ども社会に浸透し、子どもは『観察する』視線にさらされ、『標準化』という名の数値と照らし合わされて、年相応の成長を遂げているか否かが判定されるようになった」と振りかえり、『標準』から排除される危機、あるいは『標準』に囲い込むことの危機を指摘しているが、1970年代には、アリエスの「まなざし」は社会的に多くの支持を得ていなかったようだ⁴⁾。

この時期に大人がどのような子ども像を描いていたかは明白でないが、1960年代の半ばに、安部が「現代子ども気質」を出し、現代の子は以前と異なりこれまでの尺度では測れない特性を持っていることを個別データから明らかにしたことで、「現代っ子」（子ども像）という言葉が流行した⁵⁾。当然ながら、70年代では大田が指摘するように大衆文化、大衆消費文化はますます社会に定着し、子ども自体も「現代っ子」という特性が強

くなっていた。いわば、学校教育に囲い込まれ、観察され標準化される「まなざし」と大衆文化、大衆消費社会から囲い込まれる消費者の「まなざし」という二重の「まなざし」に囲まれていた。深谷の調査から当時の子どもの姿（現実の子ども）を学業の領域で見ると、主要4教科を意識し、それらを中心に学業に励み、学業の競争を極限の状態で行うという状況にある。更に、学業の競争に敗れば技能職やタレントへ志望を変更する傾向をみせている。荒れる学校や社会的な逸脱行動の世紀も二重の「まなざし」と無関係ではなからう。しかし、二重の「まなざし」から見た子どもを表す子ども観は提示されていない。

山住は、「子どもの成長にとって文化的環境は決定的に重要である」（大田、岡本他編 1979 p.96）が、「発達する豊かな可能性をもった子どもたちは、同時に多様な文化を次々に何の疑問もなしに受け入れる可能性をもった存在である」（大田、岡本他編 1979 p.98）という前提に立って、子どもの文化環境を分析し、大衆文化的な文化のあり方を批判している。「どうしても子ども達には本物の文化をぶつつける必要がある。おとなの独善ではなくて、文化の遺産のなかから大人が真剣に選び出した本物が子どもを育てるのである」（山住、1979 p.105）「子ども自身の自主的な選択とその生き方にプラスするようなテレビ・マンガ文化の創造が望まれている」（坂本、1979 p.105）という言説は、児童文化の根本的な課題は、子どもの成長に如何に係わるかということであり、子どもの生活全般を価値ある文化環境で包囲することである^{注6)}、という特性を受け継いでいると見てよい⁶⁾。

更に、「無垢」で「純粹」な子どもを、大人が用意した文化的環境のもとで育てる、という心性は依然として強く、阿部の現代っ子の「まなざし」を採り入れた教育論や子育て論の新しい子ども観はこの時代には定着していない。

また、子ども文化の「核」である遊び文化について、藤本と同様に遊びの条件が損なわれていることを指摘し、同時に、子どもの遊び文化が対立と競争の要素を強め、その構造がスポーツ的構造

へと変化したことを明らかにしている。つまり、日本の伝承遊びの中に近代文化の要素が入りこみ、遊びの内側から近代化がはじまったのであり、それは虚構的な遊びからよりルールのはっきりした遊びへとその構造が変化していったことを明らかにしている。しかし、子どもの遊びがスポーツ化していることの説明に留まり、合理性に反するような要素（著者の言う虚構的な要素）がこのレベルのスポーツに存在することへは何ら言及していない。その意味では、子どもの文化を構造的に捉えるという「まなざし」の兆候が見え始めた時期ではあったが、子どもの文化を構造的に把握するまでには至っていないと言える。山住や深谷等の文化への「まなざし」に象徴されるような「文化の遺産のなかから大人が真剣に選び出した本物」あるいは「発達課題として諸文化を位置付ける」という言説は、文化の遺産や発達課題に対応した文化がいくら子ども用に翻訳されても、それは大人文化のミニチュアを越えることはなく、子ども文化に迫り解明するにはおのずと限界があることを示している。従って、子どもの文化は発達心理学や近代教育の枠組みから理解できるところとなり、あえて子どもの文化の構造を構築する必要性は無かったのであろう。また、子ども論での子ども文化と大人文化との関係については、子どもの相対的な独自性は認めつつも、それらはやがては大人文化へ成りゆく文化であり、大人社会と対峙し、大人社会を揺さぶるものとしての位置づけはなされていない。「相対的独立性を持つ人間」や「子どもの創造的活動」という言説は、現実の子どもは、すでに安部が指摘したように大人が描く子ども像を超えているにも関わらず、子ども文化はおとなの文化の範疇にあり、やがては大人文化へと収束していくという子ども観であることを示している。

しかし、子ども論がこのような展開をみせている時期に、文化人類学や記号論などの文化を検討する領域では大きな理論的変動が生じていた。山口は、当時の「文化」研究について、以下の指摘をする。「各々の文化は、…、分節化がすすんでいるために対象化し易い分野を中心に比較を試みた結果、際限のないアトミズムに落ちいってしま

いました。「これまでの文化比較の観点は、研究する人が属する世界観を拡大したようなもので、そうした世界観の中から排除されるような部分はなかなか対象にはなりませんでした」（山口 1977pp. 410-411）。また、「文化のメカニズムとは外的な境域を内的な境域に変換させるシステムという言い方をします。つまり、文化のメカニズムは、非組織を組織に、無知を知に、罪人を聖者に、エントロピーを情報に交換させるための仕掛けである」（山口 1977 p. 418）と述べる。現実の子どもの行動（文化）が生起するメカニズムや行動の内的な意味を解釈する方法を持たず、更には、大人と子どもの文化の決定的な違いを認識し得なかった子ども論に、山口の文化論はやがて大きな影響を及ぼすことになる。

大衆文化、大衆消費社会状況と学業社会のなかに生きる現実の子どもをどのように捉えるか、いわゆる子どもを把握する方法を総括した文献は極めて少ない。そのような状況のなかで、深谷は『現代の子ども』の最終章に『子ども調査研究ノート』（深谷 1975 前掲書 pp. 155-168）と題して、子ども研究の方法論を概括している。深谷は、科学的なデータを踏まえて、生活者としての子どもを描き出した研究や子どもを基点として分析を積み重ね理論化に成功した研究が非常に少ないと述べている。深谷が概括する際に取り上げた論文や研究物を見ると、彼の言わんとする科学性の内容がわかる。すなわち、深谷の言う科学性とは、現実への鋭い問題意識、そこから生まれる分析枠組みによる分析、事実の数量的データによる裏付け、適切は統計処理等の条件を充たす方法を言っている。いわゆる、この時代の子どもの研究では、近代科学を支えてきた客観的実証に基づく科学主義が主流であったことを示している。

以上の概括をもとに、1970年代の子どもの特性は、次ぎのようにまとめることが出来る。(1) 高度経済成長に支えられた大衆文化、大衆消費社会は、子ども社会や子ども文化への大きな影響を与え、子どもの成長や発達にとり、決して望ましくない環境であることを指摘する多くの研究がな

された。(2) その対策として、早急に子どもにとり望ましい文化環境をつくり、大人が望ましい文化をつくり、子どもへ与えたり、新たに発達課題を設けることが大切である。(3) このような取り組みの背景には、近代教育の理念に基づく、子ども理解が存在し、子どもには、「発達」や「教育」の「まなざし」が当てられ、「発達可能態」としての「子ども観」や「保護」の対象としての「子ども観」が存在していた。

3 1980年代の特性

この時期は、子どもへの「まなざし」と子ども観に大きな変換が訪れた時期である。ある意味では、子ども論を分析するパラダイムの揺籃期とも言えよう。文化人類学、哲学、歴史学、子ども学等々の領域で、子どもが取り上げられ、活発な子どもを巡る論争もなされた。ここでは、その後の日本の子ども研究に大きな影響を与えたP h. アリエスや本田和子のこどもへの「まなざし」や文化論を中心にして、その特色を見ることにする。

さて、P h. アリエスの『＜子ども＞の誕生』（杉山光信他訳 1980）は、その子どもへの「まなざし」と研究方法において、日本の子ども研究を活性化するうえで、重大な影響を与えた。彼は、「アンシャン・レジーム期におけるフランス社会の小さな町の人々の生活を細かく分析することで、『子ども』および『子ども期』という観念が、近代的な家族の形成に伴って出現する、一種の近代的な『制度』であったことを明らかにしている」（本田 1982 p. 16）。換言すれば、今日の社会で考えられている「子ども」及び「子ども期」は、子どもをどうみるかという社会の＜子どもの見かた＞の所産である。いわゆる、「子ども」および「子ども期」という概念は、歴史的・社会的に作られた相対的なものであり、それゆえに、それらは、社会にアプリオリに存在するもので無く、常に社会との関係で、大人との関係性のなかで存在するものである、ということになる。また、北本はアリエスの方法について、次ぎのように解説している。本節が1980年代を対象としているので、北本の著書をここで取り上げるのは、本節の構成上問題は残すが、本田の「子ども論」を

理解するうえで貴重な内容をもつのであえてここで取り上げている。彼に拠れば、アリエスは、歴史の中で変容する「子ども観」を捉える際に、ミクロな視点とマクロな視点を統合させるという方法を用いる。ミクロな方法は、「子どもを取り巻く周辺状況の周辺雑事、衣食住の諸条件などこまごました物や日常生活の構成物までも観察のまなざしを投げかけることであり、マクロな視点とは、その時代の地域社会を突き動かし、規定している共同体の力学、社会構造、社会変動、国家といった『大状況』の枠組みを視野に入れる」ことを言う（北本 1993 pp.6-7）。子どもの存在は、大人社会の文化・社会的な「まなざし」の結果であり、客観的に大人社会と切り離されてはありえないというアリエスの言説や方法論は、子どもの歴史社会的研究や心性史の研究に大きな影響を与えることとなる。特に、子どもという存在が歴史的なまなざしでその姿を現すわけだから、現実の子どもを理解する上で苦慮している子ども論に取っては、子どもを理解する有効な「まなざし」を構築する拠りどころとなり、具体的な方法論が与えられたということになる。1980年には、柄谷は、『日本近代文学の起源』で「子供とは実態でなく、方法的な概念である。しかし、逆にいえば、そのような方法論的眼差のもとで、はじめて子供は観察可能なものとなる」（柄谷 1988 pp.175-176）と述べ、新しい子ども論の誕生に勢いをつけている。

日本の子ども研究のうえにアリエス以上に影響を及ぼす『異文化としての子ども』（本田 1982）と『子どもの領野から』（本田 1983）が、同時期に発刊される。その後、本田の一連の子ども論が立てつづけて刊行され、日本では、彼女のテーゼを巡って論争もあり⁷⁾、新しい子ども論の展開が始まる。何よりも話題を呼びセンセーショナルであったのは、子どもに「異化」のラベルを貼り、子どもの「他者性」を焦点化し、子どもを文化の周縁に位置付けることで、子ども論の新天地を開いたことである。なぜ、「異化」というまなざしが必要であったのだろうか。本田は、1970年代に児童文化論や保育学に関する著を刊行しているが、そのなかに次のような言葉があ

る。長らく実証的な科学研究と言われる視点から、幼児の観察を進めていくと、科学的にということでは数字に表せたり、既存の概念の範疇から理解できる限りの言動を記録することになり、子ども丸ごとの姿が捨象される危険性がある（本田 1974 p.）。捨象された子どもの言動に子どもの独自の姿を見出していたということであろう。

「子ども」がおとなの「まなざし」の結果生まれると言うアリエス的方法を採用することで、捨象されていた言動や子どもに係わる諸々の事象や記録を照射でき、全体としての子どもや捨象されていた言動を新しく科学の俎上に乗ることという方法論的な戦略的意図があったと見てよい。次に、発達というフィルターを通してしか子どもを見れなくなった現在の「まなざし」に、子どもの現実が鋭いメスが突きつけられているという社会状況も「まなざし」を必要とする大きな要因であった。ごく普通の子どもたちがその[まなざし]を逸脱し、発達に促した合理的な「子ども観」が急速にかげりを帯び始めている（本田 1982 p.18）と述べる。いわゆる、従来の「子ども観」では、理解できない「現実の子ども」の出現である。

例えば、日本においては、彼女等が示すような急進的な子どもの行動の変容は少数であるにしても、以前の社会への適応や可能態としての存在という子ども観では説明できない子どもの現実に、大人社会が直面していたのである。また、この時期にアメリカ社会の子どもの現状を分析した結果が日本に紹介される。ニール・ポストマンは、映像やテレビをはじめとする電子メディアが、子ども期を維持するのに必要な情報の管理を家庭と学校からもぎ取り、「すべての文化的秘密を容赦なく暴露することによって、大人の権威と青少年の好奇心との両方に重大な挑戦をしかけ」（ニール・ポストマン著 木柴訳 p.135）、結果として、大人社会と子ども社会の境界が消滅する危機を生み出したことを明らかにした。一方、マリー・ウインは、「大人が子どもを保護してきた『保護の時代』から、大人になるために費やすという『準備の時代』」（マリー・ウイン 平賀訳 p.4）のなかで「子ども時代の質の変化」、「大人と子どもの境界線が取り払われた」理由、「その

結果、子どもはどう変わらざるをえなかったのか」を明らかにしている。現代を「慎重に大人の世界と子どもの世界を区別してきた数世紀が過ぎた今、両者を区別しないパターンにもどろうとしている気配が感じられる。新しい中世の到来と「いい」（マリー・ウイーン p. 271）と述べる。

本田の戦略的意図の背景には、可能態としての「まなざし」を子どもに注ぎ、子どもを学校という制度で囲い込み、社会へ適応させる過程で、子ども自体が解体されようとしている社会・文化状況への警告や子どもは無垢で純粋であるという観念から抜けることが出来ず、子どもに負のラベルを貼ることを躊躇する子ども観への警鐘が垣間見える。更には、子どもの全体性を包摂できずに生き詰まりを見せていた状況下で、ポストマンやウイーンと同じように、新しい〈子ども-大人関係〉を見出そうという意図がみえる。

次に、子どもを文化の周縁に位置付けたのは何故だろうか。「子どもへの『まなざし』が規範から逃れ、自由を取り戻す、そのとき、私どもの前に彼らの『他者性』が鮮やかに浮かび上がる。子どもたちはおのずからなる反秩序の体現者であり、『文化の外にある存在』として、存在そのものが秩序への問いであり続けるのだから」（本田 1982 p. 19）。これだけでは子どもを文化の周縁に位置付ける戦略的論拠としての有意味性は薄い。前にも述べたが1970年代に文化人類学や記号論の領域では、文化や子どもが社会を語る仕掛けとして文化について大いに論議なされていた。

山口が『文化記号論研究における〈異化〉の概念』（山口 1976）で、今日の異化の概念を以下のように総括している。現実を「既知のもの」と「未知のもの」のダイナミズムとして見るときに、「未知のもの」が「周縁性」の領域と呼ばれる。この概念をピーター・バーガーとトマス・ルックマンは更に理論的に発展させ、「この周縁的現実と中心的現実がたえず対立することにより、現実の内包する活気あふれる緊張関係が維持できる」として、この周縁性の考えを重んじた。この『中心性』と『周縁性』の対立関係は、記号論の説く二項対立の出発点とされる『徴なし』と

『徴つき』の対立関係に始まる。…。『異人』は常に『自然=反秩序』として、『徴つき』の領域に属しており、絶え間なく『秩序』に脅威を与える。『中心』の『秩序』が『差別』し『排除』する仕方が、即ち如何に人々が秩序の中に組み込まれて行くかを決定する。秩序に組み込まれることを拒む者は、周辺にとどまり、自ら否定項となることによって、中心の文化を生氣づける」（山口 前掲書 1976 p. 1462-1463）。また、人類学者であるヴィクター・ターナーの周縁性の理論を次ぎのように紹介する。「彼は文化全体を捉えるのに『構造』と『コムニタス』の二面から制度を考察する方法を提唱した。…。彼は文化の中に反社会・反構造が表面化する三つの領域があった。それは『過渡性』と『異人性』と『構造的劣性』である。『異人性』は、個人または集団が、特定の社会組織の構造的組み合わせの外部に身を置く状態である。…。我々の視点に拠れば、この異人性の範疇に含まれる人間は、社会に対峙することによって社会を生氣づけていると考えられる」（山口 1976 p. 1450）。一方、本田子どもの周縁性を次ぎのように説明する。すなわち、「外在する子どもの発見は、内なる子どもの覚醒と不可分であり、子どもの異文化の解読は、内なる異文化との協応関係の上に成立する」（本田 1983 pp. 13-14）。それは「暗黙のうちに秩序から排除され、無視されているものを掘り起こし、光を当てることである。その光は、恐らく秩序社会を逆照射して、私どもの世界を捉え返す視力を与えてくれるに相違ない」（本田 1982 p. 22）。ここにあげた二人の言説には、「自然=反秩序」=「未知なるもの」=「子ども」そして「光を当てる、逆照射する、視力を取り返す」=「社会を生氣づける」という構造的な類似性があることは明らかであり、「子ども」を「未知なる」として「異文化」を徴づけ、周縁に位置させた理論的根拠がここにあることが分かる。

本田は、分析の対象としての子どもを江戸時代の日記に求めたり（本田 1987）、伝承的な遊び、形のない泥遊びなどの遊び等を解読することで、子ども文化の異文化性を明らかにする。対象

の抽出はP h. アリエスの手法を活用し、理論的な枠組みは山口等の文化人類学のそれに依拠し、「異化」の「まなざし」からこれまでに捨象されてきた子どもの姿、子ども文化、大人（外なる文化）と子ども（内なる文化）の関係を浮かび上がらせることに成功している。

「子どもが最も挑発的であるのは、衝撃的な事件のあれこれにも増して、…、絶えず溢れ出し、形を変えて、文化の体系に組み込まれることを拒むかれらのありようである。こうした『文化の外なる存在』からの問いかけが、私どもを挑発するのだし、私どもの身体が思いがけずそれえにんてしまったとき、その『内なる異文化』の唆しによって私ども自身が挑発者のまなざしを持たされるのである」（本田 1981 p.12）。大人も「外なる文化」として文化の周縁にあって位置していた。それ故に、現在の大人すなわち「内なる文化」の中にかつての「外なる文化」が潜在化しているかも知れず、それ故に子どもの挑発に「思いがけず身体が反応する」こともあるのだろう。

「異化」と深層心理的脈絡を駆使して、外なる文化にある「まなざし」は、例えば、大人たちに代弁される秩序世界は、泥遊びがもつ創造性を高めることなどを評価しつつ、泥は無形態であり混沌であり秩序への侵犯性をもつことから、遊び自体を排除するというアンビバレンスに陥る、等の解説に成功する。この例に見るように、これまでに単に児童や作り話、無意味な言動の意味体系の解説に成功している。しかし、外なる存在である文化はその構造を持たないのであろうか、という疑問が残る。1983年の「子どもの領野から」の段階では、子どもの文化を次ぎのように規定する。すなわち、『子ども』および『子どもの世界』を、自立的な一種の『異文化』と見るなら、そこに住まう彼ら自身の『生きられる世界』が、彼ら自身によって感得されたものということになる」（本田 1989 p.239）。「子どもたちは、『かたちある世界』と『かたちなき世界』を往還すると言うよりも、彼らの世界においては両者がお互いを包摂し、ときに出没しときに消滅しつつ、自在に翻転し浮遊する。有形と無形、分類と分類以前の区別すら無化された世界、といえるだろうか」（本田

1983 p.238-239）。本田の方法論は、これまでに見えなかった＜子どもの世界＞をまぶしく開示してくれたが、その開示してくれた＜子どもの世界＞や＜子どもの文化＞の構造を明確に規定しないで終わっている。しかし、この見解は、無制限に受容できるものではない。「かたちある世界」と「かたちなき世界」が互いに包摂する構造的なメカニズムを見出すことが必要であろうし、「ときに出没しときに消滅しつつ自在に翻転し浮遊する」メカニズムとその条件を解明することが科学的な要件であろう。「異化」という「他者性」で暴いた子ども世界の「詩的言語」の世界を科学化することが、これからの子ども論の研究者に残された課題となる。

次に、発達の概念を排除することから、「異化」である子どもの年齢との関連が無視されている。カテゴリーとしての「子ども」に対応する「文化」は、身体性（身体の構造や機能、それらの成熟や発達に規定される身体の世界）との関わりが深く、その意味合いも異なる⁸⁾。しかし、子どもの年齢が不詳であることが多かったという歴史的事実や年齢区分の「基準」もその時代の「まなざし」で決定されていたとすれば、子ども文化と年齢との対応は必要ないのではないかと、という反論が生じる。只、明らかに身体性は人間の誕生から死までの過程でその「徴」を異にするし、その身体性に「子どもの世界」や「文化」が規定されることから、全く、発達の「まなざし」を拒絶することには疑問が残る。

本田の子ども論の研究方法については、小浜（方法としての子ども 1987）や中村（本田和子の子ども論 1987）、石井（異化—本田和子の仕事のことなど 1989）との間での論争、というより3人から方法論へ批判があり、それに本田が応答するという経緯があった。「フィクションとしての子ども」（本田 1989）で3氏へ応答をし、自らの子ども論を客体化して方法論の特性をまとめている。その記述から、本田の方法論的特性は以下のようにまとめることができる。

1) 近代科学の客観性を求める具体的な方法（客観的観察や数量化など）は、丸ごとの子どもを

捕らえることは出来ず、子どもの「異化」に対応する部分が捨象される。子どもの「異化」に対応する部分は、現代の教育的価値から排除された部分であり、この部分こそが、大人社会への子どもの言い分そのものである。文化人類学の方法をあるモデルとし、子どもの「異化性」に焦点をあてることで、近代科学の方法で捨象された部分の意味の解釈が可能になる。

- 2) 子どもに関する言説を、教育的価値とか客観主義とかいう制度的文脈から奪還する意図をもつ。この背景には、何故、「通常の発達の基準」から外れたり、規範から外れることが、価値から除外されるのか、子どもの存在は、丸ごと含んだ存在が、それ（子ども）ではないのか、という人間観が見える。
- 3) 論じられる子どもは、現実に在る子どもでなく、子どもと記号化されたカテゴリーとしての子どもである。このように、異化するものとしての子どもを語りのレベルに浮上させる営みは、子どもに関する言説を活性化する試みである。
- 4) 本田は、客観性を追及する近代科学には、発達・社会適応の「まなざし」で排除される子どもの部分を捨象したり、数量化できない子どもの言動が排除される危険性があることを批判しているのであって、客観性を追及する近代科学を闇雲に排除している訳ではない⁹⁾。

このような特性を上げることが出来るが、本田は、子どもや子ども文化を解釈する際にアリエスの方法に依拠するが、それは北本が述べるミクロな視点のみからの分析に終始し、マクロな視点、いわゆる子どもや子ども文化が置かれている社会構造や制度などからの分析に至っていない。ミクロな分析とミクロな分析が重なり合うところにアリエスの方法の特性があるが、'80年代の本田の分析はその点不十分である。

この時期に本田のほかに、子どもの世界や子ども文化を読み解く意図を持った文献が世に出る。寺本は、子どもの環境知覚をもとに、子どもの原風景の構造を地理学的にアプローチしている（寺本 1988）。原風景こそ「異化」の「まなざし」

を照射した時に豊かな子どもの文化が見られる風景である。「異化」という概念は用いていないが、大人と異なる環境知覚という「まなざし」の設定は、「現実の子ども」への危機感を克服し、子どもの特性を包摂する空間への「異化」の「まなざし」の照射と見てよい。また、この時期のはじめには、世界の子どもの文化を空想的に論じるのでなくて、民族生活の事実を基に、子ども文化を発達という時間の軸でなく、世界という空間の座標に位置付ける試みがなされた。文化人類学者、教育学、心理学等の多様な領域から現実の子ども世界をもとに報告、討論がなされている¹⁰⁾。

現在、子ども論で云々されている「子ども」という「まなざし」が、文明諸国の特有のものであり、その「まなざし」から浮かび上がる子どものあり様が、人間の存在から問いなおされている。そこでは、子どもの年齢区分、子どもの個別性と普遍性、子どもと大人の生存の関係（子どもから大人までの生は直線に並ぶものでなく多面体の同次元に並ぶ存在）、時間の尺度と人間の存在などが論じられている。明確になっているのは、子どもの存在は、文明の「まなざし」により多様な形で存在し、その存在は文化相対主義的立場から認識することが重要である、ということである。

以上、1980年代の子ども論を概観してきたが、その特性は次ぎのようにまとめることが出来る。

- (1) Ph. アリエスの子どもないし子ども期が、アプリアリに現実の子どもが存在するのでなく、歴史的「まなざし」の結果、形成されるという言説と歴史分析がミクロな視点とマクロな視点の二重の「まなざし」によりなされるという方法論は、日本の子ども論へ「異化」という「まなざし」を誕生させた。
- (2) また、文化人類学の文化研究の理論、哲学、文学の領域での子どもへの「まなざし」は、新しい子ども研究の理論的バックグラウンドとなり、「異化」の「まなざし」の定着と子どもを外なる文化、大人を内なる文化として位置付ける〈大人-子ども関係〉の構造化に寄与した。
- (3) 「異化」の「まなざし」は、子ども論のみでなく、方法としての子どもへと発展し、他の領

域で用いられ、子どもの存在を浮かび上がらせることになった。

- (4) 「異化」の「まなざし」から、従来の発達心理学を中心とした子ども観や子ども文化と異なる特性が見出されたが、子ども文化の「かたちある世界」と「かたちなき世界」がお互いを包摂する構造や、自在に翻転し浮遊するメカニズムの探求が科学的な要請として残っている。

4 1990年以降の特性

Ph. アリエスの子ども研究と本田の子どもへの「異化」のまなざしに触発されたかたちで、この時期には多くの子ども研究がなされている。もちろん、校内暴力や学校不登校、学校外での子どもによる殺人事件等の“異変”が増加していることも影響しているのは当然である。この期の子ども論の特色を、ここでは、教育社会学会が課題研究として取り組んだ成果をもとに構成した門脇、宮台編『「異界」を生きる少年少女』(門脇、宮台1995)を、理論を展開する上で中心的に位置付け、他の子ども論と交錯させながら検討をすすめる。

門脇は、これまでの子ども研究を、そのほとんどが新しい世代の表面的な言動を興味本位に語ったり、その原因を浅薄な知識で解説し、子どもや若者の〈変質〉の本質的なところが把握されてなく、ことの重大性を社会や人間の将来と言う視点からの本や論文が意外と少ないと指摘する(門脇1992 p.3)。また、広田は、現在の子ども論は、子どもの実像を把握していないと指摘し(広田1998)、教育社会学としての研究課題は、「子どもをとらえる視点の多元性」と「子どもをとらえる視点の政治性」をあげる。いずれも、「現実の子ども」の把握が科学的に捉えられていないと言う。門脇に拠れば、それは、「なぜ彼らはそのような行動をするのか。その行動は何に起因し、新しい世代の何を変質させたことから生じるのか、といった問いに、まっとうに答えようとしなない」(門脇1995 p.4)からだ、ということになるし、広田に言わせれば、それは「子どもが変わったという通念とその変化の理由に対して、教育社会学は4つの次元で再検討する」(広田

1998 p.13) 子ども研究の枠組が未整備だったから、ということになる。只、子どもや子ども期は、主に発達心理学や教育学の対象として分析・研究されてきたが、それらの発達や近代教育理念の枠組みで把握できない子どもの異変が生じたという歴史的事情や子ども論のパラダイム変革の風が1980年代に始まったことを勘案すれば、現実の子どもを把握するまでに至っていないのは、ある意味では理解できるところである。

現在の子ども論は、現実の子どもを把握する為のいかなる「まなざし」を用意できているのだろうか。まず、門脇と宮台は、子ども社会を“異界”として捉えたうえで、仮説的に子ども社会の“異変”の様相を述べ、それらを具体的な事実で検討し、最後に子どもを読み解く視座いわゆる方法論へと言及している。まず、「いまわれわれが直面し目撃している子供の“異変”は、われわれの“制度化され”、“惰性化された”観念を撃ち、その変容を挑発するものである」(門脇1992 p.27)と認識し、彼らの世界を「異界」と規定する。更に、「異界」の中に「実際の世界」と「心象の世界」を含ませ、前者を「1960年頃から加速化した高度経済成長の過程で様相を一変させた日常の世界であり、自然を放逐しつつくした都市の空間」、後者を、現象学の生活世界の概念に依拠し(11)、「自分が生活している日常世界を生活者がイメージし意味付けている世界」(門脇1992)と定義する。

子どもの“異変”を制度化され、惰性化された子ども観の変容を迫るものであるという認識は、斎藤の『子どもの消滅』(1998)や森の「急変した子どもの世界、そこへのまなざしの拡散を考える時に、これまでの『子ども観』はもはや消滅したと言わざるを得ない」(森1998)等の認識にも影響を与えている。また、松澤も『子どもの成長と環境』(松澤編著2000)の中で、子どもが「無垢と暴力」「創造と破壊」「善と悪」などが同居する両義的存在であることを、視座として置くことの必要性を述べて、子ども社会への「まなざし」は門脇等とほぼ同様の文脈にある。このように、子どもの存在を「異化」とする「まなざし」が、この期になって多くの研究者に採用され、そ

これらの研究グループで支持されてきたことを表す。ここに至って、1980年代の前半に提唱した「異化」ないし「異文化としての子ども」という「まなざし」は一つのパラダイムとなったと見てよい。更に、本田等の「異化」の「まなざし」からの分析が、「子ども」や「子ども文化」のこれまでに見えなかった特性を詳細に記述するに留まったのに対し、門脇による「異界」の下位概念として「実際の世界」と「心象の世界」の設定し、その「まなざし」から現実の子どもを分析し、用いた方法論としての課題を探る一連の共同研究、更には、広田による子ども分析の枠組の設定により、実証的な科学のパラダイムとして発展する方向性が見えてきたといえる。また、方法論では、エスノグラフィックな研究¹²⁾、解釈論的アプローチ¹³⁾等が、このパラダイムの具体的な方法を発展させる理論的根拠になると言えよう。このように新しいパラダイムが共通認識となる時に、教育学の子ども論を支持しているのが片岡である。片岡は、『いま、子ども社会に何がおきているか』（日本子ども社会学会編 1999）の編集の方向について、子ども社会で「かわらないで残っているもの」、「かわったもの」という大きな枠組みで子ども社会を分析し、対処の方向を示すという前提を置くが、序論的性格をもつ第1章で「現代においてもまた、近代教育思想で想定された『子どもの本性』や『自己発展』といったものは、確かにありうる」（片岡 1999 p.14）、「子どもの社会とは、子どもの自己成長を中心とした人間関係をいい、子どもの文化とは、自己成長を中心とした価値内容（行動パターン）をいう」（片岡 前掲書 p.16）と述べる。教育がその実践において科学と信念が同居する実践科学的性格を持つとはいえ、『子どもの本性』や『自己発展』といったものは、確かにありうる」という言説は、「異化」として存在する子どもと連帯しつつ新しい大人-子ども関係>を構築することを迫られる現代において、子どもへの「まなざし」が狭いと言える。「異化」という子どもへの「まなざし」を承知しつつも、近代教育の理念と「異化」の「まなざし」の関係を、子ども社会を解説する戦略的方法論として高めきれていないことに起因

しているのではないだろうか。

もう一つは、方法としての子どもである。柄谷行人が「子供とは実態的な概念でなく方法的概念である」と規定し（柄谷1980 pp.175-176）、小浜は、著書の題目に『方法としての子ども』（小浜 1987）を用いている。方法としての子どもは、子どもを語ることが、子ども以外のことを語る比喩となったり、子ども社会を取り巻く文化・社会構造を暴くことであったりすることから、そのことの為に子どもという概念を利用することを言う。広田は、戦後の社会状況と関連させた<子どもと大人社会の関係>の変容を分析する中で、子ども問題を語ると言うことは、社会状況の中で子どもをどのように見るかということであり、そのことは、社会理論やマクロ原理をめぐる政治的葛藤を語ることであると言う（広田 1998）。また、中河や永井は、「子どもの概念」に、政治的な意味合いを持たせることが重要であると言う（中河や永井 1993 pp.1-11）。もちろん、方法としての子どもの意図は、本田にも見られるが、子ども論の視点から言えば、子どもを語ることが社会を暴き、その結果がこどもの存在を豊かにするという循環が必要であろう。方法としての子どもは、決して大人社会の諸問題を解決する為の政治性ということではない。

パラダイムで何がどのように解説できたか

門脇、宮台編は、タイトルから分かるように子どもの社会を「異界」として捉え、その「現実の世界」と「心象の世界」を読み解く試みと方法論へ挑戦したものである。一方、この時期に、『いま、子ども社会で何がおこっているか』（子ども社会学会編 1999）、『人間と環境7 子ども成長と環境 遊びから学ぶ』（松澤員子編 前掲書 2000）が公刊されているが、編集方針には、子どもへ「異化」の「まなざし」を照射する意図が見えるが、構成する論文には子ども社会を読み解くパラダイムへの意識が少なく、ア prioriに眼前の子ども社会を従来の実証科学的方法から分析しているものがほとんどである。

さて、宮台は“異変”のラベルを貼られる子どもの象徴的な行動とも言えるブルセラ高校生等を

対象として、なぜ、このような行動が家族にばれながらも生じているのかを家族とのコミュニケーションから読み解く。「団塊親が、旧来の〈世間〉的共同体を〈若者〉的共同体という幻想に置き換えたことで、〈世間〉の消失によってアノミー（指針のない状態）に陥った家庭的コミュニケーションは、ニューファミリー的な『友達夫婦』『友達親子』という幻想モデルで補完されてきた」（門脇・宮台編 1995 p.132）。しかし、そのことが「この過剰な幻想性を嫌う子ども達にとって、単にやり過ぎすべき存在にしてしまう」（門脇・宮台編 前掲書 p.133）。『過剰に幻想的な親』と『過剰に現実的な子ども』が、断絶したまま、同じ〈ノリ〉に生きる奇妙な関係は、それ以前（1960年代）から、静かに進みつつはあったのだ」（門脇・宮台編 前掲書 p.134）。〈幻想的である〉とは、親や子が表層的なロールプレイングを続け互いが関係を持ち、親子関係が成立していると感じることを意味する。また、〈ノリ〉とはロールプレイングの切符を買えばいつでも参加出来る関係をいう。この幻想的な関係を続けることが親子関係を維持することだから、ブルセラがばれても、そのこと自体は親と子どもが互いにロールプレイングすることとは無関係である。親が「止めなさいよ」と言っても、「それじゃ〈ノリ〉から降りるよ」と言われると、幻想関係が壊れるので、親の抑止力は無いこととなる。“異変”としての子どものブルセラはどのように解読される。注目したいのは、宮台の分析対象へのフィールドワークの精緻さとそこから得るデータの確かさであり、それらのデータを実証的な統計的データと重ね合わされて解読してゆく方法である。宮台の分析結果は、「心象の世界」に対応する子どもの“異変”と徴づけられる行動は、フィールド・ワークと実証的なデータを統合した分析でかなりのレベルまで解読される可能性があることを示してくれる。

清水は（清水 1995）、若者の最先端文化と徴づけてもよい原宿の少年少女を対象とした徹底したフィールドワークによる分析をし、これまでに見えなかった文化を解読している。原宿の少年少女を支える彼らの精神軸を、〈社会的自立願

望〉〈自我確立の願望〉〈現実への対峙〉から構造化し、時系列の変化を解読したのはその一例である。ただ、最後に、「1993年、少年たちの世界は、いま確実に変化を遂げつつある。しかし、その変化が『宗教的な』というニオイをはなっているということがわかるだけで、その内容、行き先、そして、それによって生じる事柄などを知ることできない」（門脇、宮台編 前掲書 pp.89-90）と言う。対象がそれほどに可變的で解読不可解な意味体系をもつものなのか、研究者側に解読するコードが用意されていないのか、“異変”の先端にある彼らの世界と響き合う「内なる文化」を研究者が持ち得ていないからなのか、その解は明らかにされていない。いずれにせよ、彼らの行動は、その世界の「意味体系」を読み解くコードを用意せよと挑発するものでもあろう。本田や村瀬は、「外なる文化」を読み解く時に、「内なる文化」に内在しているかつての「外なる文化」と解読対象としての「外なる文化」との響き合いを強調した。しかし、本田は、その響き合いを前提として、子どもの文化が『形ある世界』と『形なき世界』を包摂する構造であるとしたが、その構造的メカニズムは特定せずに終わっている。また、最近のポケモンを観る子どもの分析においても、子どもが語るのは、「それ（ポケモン）がもたらす興奮と、それによって喚起される情動に関してである。かれらにとって意味があるのは、ここの作品の主題や構造にまして、それが発揮する機能（例えば、光や動き）であり、それを見ることでもたらされる体験であるということだろうか」（本田 1999 p.132）と述べ、意識の特性の言及に留まっている。

アリエスの方法の具体的な展開

北本の一特性の一つは、アリエスの方法を具体的に紹介したところにある。「アリエスは歴史の中で変容する子ども観をとらえるさい、『二重のまなざし』をそそいでいる。その一つは、子どもの発育と発達に関わるさまざまな経験事実に対して、ミクロな視点とマクロな視点とを統合するまなざしである。そしてもう一つは、子どもの社会化が行なわれる生物学・自然科学的領域と社会・

文化的領域において人間形成がされるという複合的まなざしである」(北本 1993 p.7)。後者の「まなざし」は、双方向的に解釈をすることで、「人々の生活意識、精神的態度、生活感覚、深層を重層的、かつ多元的にとらえるようとする視点である」(北本 前掲書 p.9)。一種の強制的な規範と化したかにあるアリエスの「まなざし」がどこか上滑りして理解されているなかで、北本の『子ども観の社会史 近代イギリスの共同体・家族・子ども』(1993)は、今後の子ども研究に重要な意味をもっている。

中河等は、現在の子ども論を「現代の社会の『子ども』という概念を所与とみなして、その概念のもとで、子どもの境遇を述べ問題を提起するものと、アリエスの『<子ども>の誕生』に触発され、子どもという語が指し示す社会的な『まなざし』自体を対象化し、検討する子ども論に二分化し」、「子どもという概念が、さまざまな人々がさまざまな社会生活局面で、多様な意味合いをめぐるせめぎあいの道具として使われる」ことを確認することが、アリエスの方法をもとにした子ども研究では、非常に重要であるとし、「子ども」概念に『子ども』ポリティカル」の意味合いをもたせた分析を行う(中河、永井 1993 pp.9-10)。中河の姿勢はアリエスから先をどう進むか、という問いへの解を生み出す一つの試みにもみえる。著者の一人である赤川は、「悪書追放」「有害コミック規制」に関する詳細な資料を経験的に読み解く中で、現代の子ども観を発見し、更に、「子どもを語る」ことが、政治的な意味合いを持たされることを明らかにする。1990年以降の日本の有害図書反対運動に関する分析から、以下の2つの子ども観が析出される。この種の図書を規制する側は、「リアリティを共同構築する中で、産出していく子どものイメージは、無垢ではあるが判断力がなく、有害な情報に汚染されやすい存在としての子どもである」(赤川 1993 p.177)。すなわち、子どもは大人とは異質な存在、つまり十分な権利行使の主体ではなく、ゆえに彼らの権利を大人が代理的に保護しなければならない存在である(赤川 前掲書 1993 p.178)、という保護の対象としての子ども観である。他方は、「自己決定権

をもつ子どもであり、大人と同じように振る舞い生きる能力をもった逞しい『小さな大人』(赤川 1993 p.178)であり、権利主体としての子ども観である。前者が大人と子どもの差異を極大化する本質的で保守的な意匠をまとうのに対して、後者は両者間の差異を極小化する言説で、子ども解放を唱える近代主義言語と命名される。これらの子ども観が析出されるのは、有害図書反対運動での大人と子どもの差異をめぐる闘争を「子どもの権利対立」の視点から分析する箇所である。有害図書規制側は『子どもが健全な環境で生きる権利』や『女性が差別されない権利』等を主張し、有害図書規制反対側は、『子どもが自己決定する権利』や『表現者が自由に表現する権利』『受け手が表現を受け取る権利』などを主張する。実は、前者は子どもの権利条約の第17条「子どもの福祉に有害な情報および資料から子どもを保護するための適当な指針の発展を奨励する」という条文に依拠し、規制反対派が、同条約第13条「子どもにも表現をする自由と情報を得る権利がある」と第17条の「…特に児童の社会面、精神面及び道徳面の福祉ならびに心身の健康の促進を目的とした情報および資料を利用することが出来ることを確保する」に論拠を求めている。注目すべきは、規制反対派が有害図書の規制に反対する為の法的根拠を第13条の表現の自由と情報を得る権利と第17条の道徳、福祉、心身の健康を促進に求めていることである。このことは、子ども自らが自分の権利を主張し、権利を実現するための行使力を持っていることを表すものであ。すなわち、小さな大人という子ども観には、現存する子どもを大人と変わらぬ物事の判断や理性を備えた存在と見る「まなざし」が前提として必要であることを示している。

次に、子どもが描かれる性をテーマとしたコミックや読み物の分析から、「ポルノグラフィに描かれる『少女』への性的欲望は、最極大化の前提に立ち、美少女以降のポルノの世界は差異極小論に支配されている」(赤川、中河 永井編著 前掲書 1993 p.192)と結論づける。前者では、「ロリータ」(1955年、邦訳 1985年)の中の、ニンフェットを買春する主人公ハンバート

が少女モニークに寄せる心性が分析される。「彼の欲望は性的な匂いをもった大人の女性でなく、あくまでも大人以前の未成熟な身体に対して向けられたものでなければならぬのだ。ロリータが『少女』から『女性』に変わる事への不安と恐れが生じるのも、これゆえである」(赤川, 前掲書 1993 p.183) という言説が極大化の論証となる。一方、後者では1980年以降のポルノグラフィにおけるロリコン系・美少女系と呼ばれるジャンルを対象にして、〈少女と性〉が分析される。「たいていの少女たちは当然のごとくなんらかの性体験を持ち、どのようなシチュエーションで性行為が開始されようと、最終的にエクスタシーやオーガニズムを享受できるように描かれる。(中略) つまり美少女系に描かれる少女達は、少女の面影を可愛い顔を残しながらも、すでに性的に成熟した大人の女性である」(赤川, 1993 p.188)。赤川は、子ども観が、大人と子どもは異なるものであるという「子ども観」から、大人と子どもは変わらない存在である子ども観へ急激に変化していること、換言すれば、子どもと大人の世界の境界線が希薄化していることを示している。

また、飯島は民俗学の立場で、日本の「子ども」の存在を歴史的に読み解いている。日本では、中世までは「子ども」は小さな大人として見られていたのが、「家」意識が民衆のなかに芽生える「近世になると、大人と子どもは量的差異だけでなく、質的に異なる一線が存在し、子どもは生理的、心理的、社会的に大人と異なる存在と見られるようになった」(飯島 1991 p.13)。更に、明治の近代国家成立とともに、この「小さき者」への「まなざし」は、公教育の採用によって徹底されていった。

子どもの時空間や文化に関する研究

また、この時期には、これまでと異なる子ども社会・子ども文化研究が台頭している。広義に言えば「異化」の「まなざし」の文脈にあり、従来と異なる方法で、子ども世界の解釈へアプローチしている。そのようなものとして地理学的アプローチから子ども世界を地図に再現しその「心象

風景」を描く寺本(1988)、子どもの遊び空間や社会をエコロジーの視点から解説する南(1995)、子ども社会の構造や子ども文化の構造を「コスモロジー」の視点から読み解く藤本や鶴野等々の研究(藤本編 1996)をあげることが出来る。寺本は、子どもの世界の拠点として、「秘密基地」「子ども道」「お化け屋敷」「子どもの世界だけで通用する地名」を取り上げ、子ども世界が豊かになる原風景の原理を見出している。南は、『となりのトトロ』を分析対象とし、『となりのトトロ』は子どもたちのイマジネーションと父親の共感的理解の合作(コラーボレーション)であり「ファンタジー(想像)中心の世界が、客観的知識あるいは概念的操作を中心とした世界へと組み直されていく過程であり」(南 前掲書 pp.7-9)、「トトロやマックロクロスケが姿を現す時空間は、精神分析学者ウニコットの「中間領域」と規定する。同様に、『たけくらべ』では、子どもの遊び世界を分析対象として主人公が子どもの世界から大人の世界へと連れ出される過程を読み解いている。その際に、「子どもの遊びの時空は、それをとりまく大人社会の構図や文脈と対をなす小宇宙(マイクロ・コスモス)である」(南 前掲書 p.10)と述べる。このように、『となりのトトロ』と『たけくらべ』に見られる子どもの遊びの世界を「異化」の「まなざし」で把握した後に、それらを心理学や隣接科学の枠組みで捉えなおす試みをする。したがって、子どもの遊びや社会を構成している原理の探求というより、子どもの世界が大人社会へと分節化される原理の探求に焦点が置かれ。南のアプローチは、当初「異化」の「まなざし」から、子どもの世界を把握しながら、最終的には心理学等既存の科学の枠組みで捉えかえるという手法であり、「異化」の世界である子ども社会や子ども文化の構成原理やメカニズムを見出すにはある種の限界がある。

鶴野は、コスモロジーに関する基本的理論を整理し、『コスモロジー』は『秩序』を原義とする『コスモス』探求、すなわち考察の対象を、それ自体完結し独立した秩序(体系・構造・意味)をもつ総体(まとめ)としての〈小宇宙〉である

と同時に、より大きな全体（＜大宇宙＞）や他の＜小宇宙＞と緊密に結びつき影響し合う存在として見なそうとする、一つの視覚あるいは発想法である」（鶴野 1998 p.5）と定義する。そのうえで、コスモロジーの方法論について、『『子ども期文化』の具体的な対象世界（事物）に『意味の網目』（矢野）をかぶせることによって、そこに内在する秩序や構造、岩田の言う＜内なるシステム＞を発見するという『宇宙論的解釈』が、『子どものコスモロジーの一つの具体的な方法論となる』』（鶴野 1998 p.7）と述べる。さて、コスモロジーの視点から、子どもへ接近している研究を基礎付けているのは、中村や河合、岩田等（14）であるが、正面から子ども論へ接近するのは、藤本、鶴野、等である。藤本自身は、コスモロジーの視点から、子ども文化（遊び）に関して分析をおこなっているが、コスモロジーの概念やコスモスの構造を規定するまでには至っていない。

子ども文化と類似の概念に児童文化があるが、その違いの一つは、大人と子どもの関係への基本的な視座であろう。児童文化の代表的な研究者である古田が、「このことばにあたえられたいくつかの概念の共通部分は、大人が創造して子どもが享受する児童文化財と子どもの文化的創造活動及びその所産である。その成立基盤は子どもが大人に対して相対的独自性をもつ人間だということにある。この＜こどもの発見＞から「児童文化」という概念は生まれてきた」（古田 1983 p.142）と述べる。また、大人文化との関係では、児童文化は大人の文化に対立する概念でなくて、あくまでの広い意味の文化の内円心である。そして、その内円心は将来において外円心を形づくる根源となる」（古田 1996 p.35）と規定する。本田が、「発達」、「適応」その手段としての近代の「教育」や「社会化」への異議申立てという姿勢を「異化」の背景にもつものに対して、古田の＜内心円—外心円＞構造の背景には、児童文化の根本課題は、子どもの成長発達との関係であり、価値ある文化環境で、子どもの生活全般を整備するという姿勢の違いがみえる。

1980年代の前半に児童文化研究領域のなかで子

ども文化が用いられたり、教育学関連の領域から子ども文化の概念が生じたのは、この時期に如何に子ども社会や子どもの文化が急変しているかの証左でもある。古田は、児童文化の概念では、急変している子ども社会を把握することに距離があるという認識から、児童文化の領域論や児童文化環境の整備論に研究を集中し、児童文化に替えて子ども文化の発想を取り入れている（古田 1996）。森は、『『児童文化』から『子ども文化』への変化を強調するようになった要因を、子ども社会へマスコミ文化が深く浸透してきたこと、児童文化が主な柱にしてきた大人が作る良質な文化がマスコミ文化という大衆文化によって凌駕されてきたという文化状況に求め（森 1998 p.87）、川勝は、児童への教育的配慮が強すぎるといふ児童文化への反発に求めている（川勝 2002 pp.3-12）。

さて、藤本は、遊びの実証的研究を通して、特に、「天下町人」「ヤンマ釣り」などの遊びの方法、遊びのなかでの大人の創造を凌駕する子どもの創造的な資質等が、長い年月にわたり子ども集団のなかで伝承されてきた事実を見出している。これらの遊びは、その創造の源が子ども自身にあること、遊びが一つの構造を持ち、長い年月にわたり伝承されていることから、大人の文化とは異なる遊び文化である、と規定した。いわゆる、子ども自体が創造の主体である「子ども自身が創る文化」であるという。後に、R. リントンの文化の概念に依拠し、『『子ども自身の文化』とは、一つの集団や社会の子どもたちによって習得され、伝承されている子どもたち特有の生活様式である』（藤本 1996 p.42）と定義し、下位概念として、(1)言語により表現される文化、(2)身体により表現される文化、そして(3)物事や生き物にかかわって表現される文化、を設けている。また、この他に子どもの生活様式の一つである子育てや教育を意識した子どものための「子ども形成の文化」を設けている。この二つの文化と「大人の一般文化」との関係性を、最中心に「子ども自身の文化」、最外側に「大人の一般文化」を、更に、両者に入りこんだ空間に「子ども形成の文化」を位置付けて構造化している（藤本編 1996

p. 189)。

「子ども自身の文化」の背景には、大人文化を上位に子ども文化を下位として位置付ける規範、学校文化を表文化とし遊び文化を裏文化とする文化観へのアンチテーゼがみえる。「子ども自身の文化」を大人文化や学校文化と対等に位置付けることで、子どもが創造的な主体として存在できる空間が出来、子どもの成長にとって不可欠である遊びの伝承が可能となるというわけだ。「子どもは大人と違う体を持っている、違う歩く速さを持っている。力も違う。いろいろなものが違いますから、そういう意味で自分自身の独自の世界をつくりあげていると思いますね」(藤本 1996 p. 9) という子ども世界への思いや文化人類学的知見によって、「子ども文化」の構想を「子どものコスモロジー」へと発展させていくことになる。コスモロジーへと発展する経過や構想、あるいは藤本が描いていた「子どものコスモロジー」の全体像については、鶴野による優れた分析がある(鶴野 1998)。藤本の「子どものコスモロジー」構想は、1980年代に入り本田や河合等が、宇宙の概念で子どもの存在を語り始めたという時代的背景の影響もあるが、岩田啓治等との世界の子どもと遊びに関するプロジェクトでの共同研究に、大きい影響を受けているのではないと思われる。藤本のコスモロジー構造の原型と推察できるものが、未開社会を舞台として構築した岩田の「伝統文化と<コスモス>」にみられるからである。

さて、鶴野と藤本によるコスモロジーは次ぎのように定義される。狭義には、「子どもの社会を組織し、子ども自身の文化を生成する源となる、環境世界に対する子ども独自の意味付けの仕方」、もしくは、「生成の源としての子どもの心の世界もしくは内的宇宙」をいう。更に、広義には「生成の源としての『子どもの内的宇宙』、その表現形としての『子ども自身の文化』、そしてこれを表現する主体である子ども存在の集合体としての『子ども社会』、以上を包摂する『子ども独自の世界』を総称して『子どものコスモロジー』とすることもできる」(鶴野 前掲書 pp. 193-194)。『子どものコスモロジー』が構想されたこ

とで、「子ども自身の文化」概念から排除されていた一瞬の発想に基づく言動(遊び)一すなわち、それらは一定の様式はなく、その伝承の経路も明確ではない、しかし、子どもの心に連綿と流れ遊びに表現される言動であり、子ども自身の文化のいのちである一が、「子どもの内的宇宙」に位置づけることができ、子どもの遊びの全てを含む構造が出来あがった。しかし、『子どものコスモロジー』は上述したように鶴野により、検討され理論的な発展の方向は示されているが、コスモロジーの核である「子どもの内的宇宙」、「子ども自身の文化」、「子ども社会」の理論的内容や三つの相互の関連については、確定するまでに至っていない。

以上、1990年以降の子ども論を振りかえってみたが、その特性を要約すると以下のようなろう。

- 1) 本田が1980年代に提示した「異化」の「まなざし」からの研究が多くなり、その文脈での研究者による成果も上がり、「異化」のまなざしは、子ども研究のパラダイムとなった。
- 2) このパラダイムは、門脇、宮台、広田等により、その内容が理論的に発展させられ、特に、門脇は、子どもの世界を「異界」としその下位概念として「現実の世界」と「心象の世界」を設け、分析の具体性が明確になった。
- 3) 「子ども」ないし「子ども期」は、保護の対象であれ、権利の主体者であれ、いずれにしても「政治性」をもつという「方法としての子ども」の意味合いをもつことが検証された。
- 4) 子どもと大人の距離は、1970年代以前の極大化の時代から、もはや極小化の時代に入り、あたらしい<子ども-大人関係>のあり方が模索され始めた。
- 5) 子ども文化へのアプローチは、<子ども-大人関係>からは、周縁性-内縁性という構造と子ども自身の文化-子ども形成の文化-大人文化という構造が提示され、更に、子ども文化については、コスモロジーの視点からか、子どもの内的宇宙-子ども自身の文化-子ども社会という構造化が図られている。しかし、いずれの

場合も、構造の理論的内容や要素間のメカニズムは特定されず、今後の課題として残されている。

- 6) 新しいパラダイムからの方法論としては、従来の実証的科学主義の他に、エスノグラフィックな方法が有力であるという指摘がみられるが、「異化」としての子どもを対象とした研究はまだ始発期にある。

4 考察

1970年代までは、「発達」のまなざしで照射され、「可能態としての子ども」観が支配的であったのが、1980年代に入り、アリエスの歴史社会的な「まなざし」から、「子ども」や「子ども期」を形成するという方法、更に、アリエスの方法論的視点と文化人類学に依拠し、子どもに「異化」の「まなざし」を照射し、「異文化としての子ども」観が形成されていく。更に、1990年代に入ると、「異化」の「まなざし」は、理論的な整備が進み「現実の子ども」を分析するパラダイムとして定着してくる。「異化」の「まなざし」を最初に提示した本田は、この期の終わりに実証的なデータによる分析をすすめ、「異化」の「まなざし」から分析した子ども論を強化する作業を行っている(本田 2000)。アリエスのマクロな視点からの分析である。さて、「異化」の「まなざし」に帰ろう。子ども社会を「異界」と規定し、その下位概念として「現実の世界」と「心象の世界」を設定した門脇のものがある。約半世紀の子どもへの「まなざし」の変化をこのようにまとめた時に次ぎに述べる課題が残る。

「異化」の「まなざし」で子どもを照射する試みは、これまでにはみえなかった子どもの特性を暴いてくれたし、現実の子どもは「装った自分」と「本当の自分」を同じに生きることを余儀なくされているということも提示してくれた。その意味では、“異変”とも見える子どもの言動を、今日の子どものはこういうものだ(子ども像)と認識でき、今後の新しい<子ども-大人関係>を創るうえでは有効である。しかし、“異変”とも見える子どもの言動が地域性や階層性を超えて生じているのは事実であるが、そのことが現代社会の産物

であることもまた事実である。しかし、“異変”の徴をつけ得ない子どもの言動が多く存在するのにもまた事実である。このことは、「異変」の言動と「正常」な言動が、子ども社会でどのような勢力関係にあるかを把握する必要性を要求している。原宿の青年の文化が日本の青年の価値形成や現実の言動をすべて統制していることはなかるう。価値形成や現実の言動への具体的な機能の内容を精査していくことで「異化」の「まなざし」の可能性と限界が見えてくる。

「異化」の「まなざし」から浮かびあがる「子ども」は、発達心理学が規定する暦年齢とはどのような関連を持たせればいいのか。慎重に「子供」「若者」を分離した文献もあるが、現在の子ども論のほとんどは、「子ども」という枠で幼少期から青年期までを語っている。年齢も社会歴史的「まなざし」の産物であることは認められたとしても、藤本は「子どもは大人と違う体を持っている、違う歩く速さを持っている。力も違う。いろいろなものが違いますから、そういう意味で自分自身の独自の世界をつくりあげていると思いますね」(藤本 1996 p.9)と言い、本田は、子どもの世界について「『子ども』および『子どもの世界』を自立的な一種の『異文化』と見るなら、それはそこに住まう彼等自身の『生きられる世界』が、彼等自身によって感得されたものということになる」(本田 1989 p.239)という。両者の言説に見える「自分自身の独自の世界」とか「彼等自身によって感知された生きられる世界」は、当然のことながら、身体的能力や認知能力により、その内容が異なってくる。大人と比較し、子どもの世界は云々というわけだから、暦年齢によりその世界も異なってくるのは自然な帰結である。しかしながら、現在の「異化」の「まなざし」では、暦年齢との対応で「他者性」や「異文化性」を特定しようとする試みは見られない。『となりのトトロ』を分析対象とし、ファンタジー(想像)中心の世界から、客観的知識あるいは概念的操作を中心とした世界への過程と規定し、トトロやマックロクロスケが姿を現す時空間は、精神分析学者ウイニコットの幼児期に見られる「中間領域」と規定する(南 pp.7-10)。ト

トロやマックロクロスケが姿を現す時空間は、幼児期にある子ども、少年期の子どもが存在しているにもかかわらず、幼児期に特有な「中間領域」という概念、すなわち、子どもの世界を既成の概念で強引に囲い込むという弱点はあるが、「異化」の「まなざし」を年齢と対応させるという試みへの示唆を読むことが出来る。「発達」の「まなざし」から子どもを見ることへの批判から始発した「異化」の概念ではあるが、「異化」概念に当初から取り組んだ本田にしても、子どもの世界の自立性を認めているのであるから、発達心理学等の発達の科学的内容を完全に無視するのは本意ではなかろう。「異化」、「異界」の「まなざし」を年齢と対応させて精緻化していくことも次ぎの課題である。

子どもの文化特に遊び文化に関しては、その特異性が明らかになったのは、「異化」の「まなざし」の成果である。子ども文化が周縁に位置づくことで、文化が大人文化を挑発し、活性化するという言説と子どもと大人社会の境界の消滅や子ども文化と大人文化の距離の極小化とはいかなる関係にあるのか。本来は周縁に位置している子ども文化が中心の大人文化に徐々に採りこまれているのか、中心の文化が周縁へ移動しつつある結果なのか、双方がメディア文化へ歩み寄っているのかは明らかでない。メディア文化が両者の境界を消滅させたというニール・ポストマンの言説は、メディアに乗らない情報（文化）は領域的固有性を持ちながら、それぞれの領域ごとの境界をもつと言うことにもなる。“異変”と徴づけられる子どもの言動は依然として増加し、拡散している現実があり、この“異変”の理解に大人は苦勞している。子ども社会と大人社会の境界の消滅という言説は、ある部分の領域では極小化が進み、他の部分では依然として極大化がみえるということになる。

子ども文化については、これまでに『かたちある世界』と『かたちなき世界』がお互いを包摂する構造や自在に翻転し浮遊するメカニズムの探求することが、今後の科学的な要請であることを上述してきた。子どもの世界を「異化」の「まなざし」や「異界」の「まなざし」から見ることは、

子どもの文化や社会が独自の自立した世界であることを前提として認めていることである。また、「異化」の「まなざし」の背景には、『子ども＝発達可能態』『発達＝価値』そして『子どもの存在意義＝発達の価値の実現』という近代的前提を覆して子どもや人間の存在意義の転換を促すという哲学がある。いわゆるまるごとの子どもを把握するという戦略的意図がある。子どもは社会化によって、その社会を担う社会人に成り行くのであるが、社会化過程で子どもがどのような文化環境のもとにあるかはその後の成長に大きな影響を与える。1970年代以前の「発達」の「まなざし」であれ、1980年以降の「異化」の「まなざし」であれ、肝要なことは、その「まなざし」からの文化がまるごとの子どもを如何に包摂できる構造を持つかということである。更に、そのような子ども文化を社会化過程に如何に位置付けるかということが肝要になる。

まるごとの子どもを包摂できる可能性をもつ子ども文化に関する理論は、藤本や鶴野のコスモロジーの概念であろう。本田の『『かたちなき世界』と『かたちある世界』』は、コスモロジー言えば、表現形態としての「子ども自身の文化」に対応する。『かたちなき世界』は文化の生成の源である『子どもの宇宙』に近い形態である。そこには、ルールや役割が無秩序であったり不明であったりするし、黙示的規範の存在も不明である。しかし、行動自体は展開するという特性を持つ。一方、「かたちある世界」は、「子ども自身の文化」に対応する。このように考えると、本田が「異化」の「まなざし」から特定した子ども文化の構造は、コスモロジーを基に発展させる可能性があることが分かる。ただ、「かたちある世界」がやがて「かたちある世界」へと発展するという関係なのか、並列的に存在するかにより文化の構造は変わってくる。この点の探求が今後の課題となる。

<注>

- 1) 全国の約12万人の小学4年生以上を対象とした「小学生のスポーツ活動に関する調査」によれば、学校外のスポーツ・クラブやスポーツ教

室への参加者は、該当学年の約50%である（文部省 1995 小学生のスポーツ活動に関する調査協力者会議）。また、日本スポーツ少年団の団員数は、1998年現在で約100人である。例えば、鹿児島県の場合、小学校4年生以上の約30%が団員である（日本体育協会 1993 日本スポーツ少年団30年史 三集アド）。ここに示した直接的スポーツ参加率は、スポーツが子どもの生活に日常的に定着していることを示している。また、日本スポーツ少年団の場合、登録している種目の全国大会が毎年開催され、多くの単位スポーツ少年団は、全国大会での優勝を目標として練習に励んでいる。今日の子どもが参与するスポーツが、強い勝利志向の価値を持つことを、内海（1987）影山（1987）k. フォルクウェイン（1993）山本（1996）等は明らかにしている。

- 2) 「小学生のスポーツ活動に関する調査」（文部省 1995）では、スポーツ障害の発生要因として「長時間でハードな練習」、「非科学的な練習」「勝利至上主義的な練習」等を指摘し、スポーツバーンアウト発生に要因として、B. Elizabeth(1980)はグループの雰囲気の非需要、杉本（1983）はスポーツ規範と主体者のアンビバレントな関係をあげる。吉田（1989）は競技者と指導者との相互作用と競技者の役割に注目し、バーンアウト発生機序を、松尾他（1990）はスポーツバーンアウトを規定する社会心理的要因を明らかにし、海老原（1993）は、費用便益、満足度、選択性の視点からスポーツバーンアウトを解釈している。また、永島（2002）は、過社会化現象ではハードな練習から生じるオーバートレーニング症状を指摘している。
- 3) 上述した「小学生のスポーツ活動に関する調査」や「日本スポーツ団30年史」をみても、組織的スポーツへの子どもの参加は依然として多く、少年団に登録された組織的スポーツの全国大会が開催され、その運営には民間の企業がスポンサーとして参加している。また、子どもの親の熱狂的な支援については多くの報告がなされている。

4) 本田和子は「子ども100年のエポック 『児童の世紀』から『子どもの権利条約まで』」の中で、アリエスの「<子ども>の誕生」が1960年に出版されて以降、既に日本でも1960年代からアリエスを研究され、1983年の教育学会で発表されているがあまり反響がなかったことを述べている。

5) 斎藤次郎は、「子ども達の現代」（1975）で現代の子どもが商業社会に囲い込まれていく構造を描いている。大衆消費文化は子どもの世界にも及んでいて、そこには既に「消費者」としてのまなざしがあった。

6) 吉田足人は、1970年代の半ばに、今の子どもに必要なことは、大人が子どもの為に創造した文化遺産から本物を選び与え、子どもを価値ある文化環境で包むことだ、と主張した。これらの詳細は、吉田 1996 「児童文化とは何か」にある。

7) 本田が「異文化としてのこども」をはじめとする一連の子ども論で提示し新しい方法論を巡る論争の核は、(1) 本田の方法論は実証性、客観性を重んじる現代科学の限界性を過度に強調しすぎている点、(2) 子ども（子ども文化）と大人（大人文化）との関係性を分析する際に安易に文化人類学的手法を取り入れていること、更には(3) 子どもないし子ども文化の解釈が詩的言語に頼りすぎ科学性に欠ける等々であった。本田は「フィクションとしての子ども」（1989）の中で、これらの批判への反批判を展開しつつ自らの方法論を客体化し検討を重ねている。

8) 幼稚園の庭にある2メートル位の高さの土の塊は、幼児には容易に富士山に見立てられ、本人はれっきとした登山家へと変身する。ところが大人は富士山に見立てることが出来たとしても登山家にはなれない。身体性の違いは周囲の環境や自らへの意味づけを変えてします。保健体育科の教材の学年への構造的配列は身体性の違いに起因する場合が多い。特に、低学年の基礎的運動と高学年での教材への意味づけには大きな差異がある。

9) 本田は、実証主義的科学万能という科学の限

- 界を指摘し、科学的言語に代えて「異化」の「まなざし」から子どもを照射し、科学的言語から捨象される子どもの特性を拾い上げ、その結果を詩的言語で体系化する試みを行った。しかし、科学性の全てを否定していないことは、2000年に発行された「変貌する子どもの世界」の実証的なデータに基づく子ども社会の分析に現れている。
- 10) 子どもの文化を発達という時間の軸に乗せるのではなく、世界という空間の座標に位置づけて考えるという視点からの研究プロジェクトの一連の研究、成果発表のシンポジウムである。具体的には、1983年間から84年までの2年間、国立民族学博物館を中心に全国の多数の研究者とともに続けられた共同研究『子ども文化の文化人類学研究』と1984年と1986年に開催されたシンポジウムがそれである。第2回のシンポジウムの提言者には、文化人類学、教育社会学、児童学、民俗学、教育学、心理人類学、心理学者等である。
- 11) この点について、門脇は同書で「ここでいう『生活世界』イメージは、現象学的社会学で言うところの『日常世界の現実』(the reality of everyday life)を指している」と言い、山口節夫(1977「日常世界の構成」新曜社)に依拠している。
- 12), 13) 子ども研究の方法論では、結城が日本の保育教育での集団主義教育を析出した研究やR. キングが、教育で制度化された教育「イデオロギー」が実際には「理想」に終わることを見出した研究がエスノグラフィック的手法であることを紹介し、それらの方法がより科学性を高めるなかで有力な方法であるとする。広田は、子ども研究のエスノグラフィックな方法論について、行動自体や言語分析のみでは、それらを生み出している「生活行動や価値観の変化」の確認が難しく、過去のデータとの比較検討を欠いたまま、新規性のみが強調されるとして、これらの文脈での成果への疑問を呈している。「異化」のパラダイムの文脈にあり、過去の解釈的方法から積み上げた知をもとに、メディア社会の子どもを「ほとんど不可避免的に外面と内面の分裂のなかで、装われた子どもとしての自分と大人っぽい自分、偽りの自分と本当の自分、表の顔と隠された顔」といった二重性を生きることになる」と解説した山村は、今後の子ども研究に必要な条件として、大人の思いこみからの解放、フィールド・ワークでの「最小限度の大人の役割」の遵守、子どもの生活世界の視点の確保をあげ、子ども研究に適合的なのは「実証主義方法よりはエスノグラフィックな解釈的アプローチとより親近的であることは十分予想できる(門脇、宮台編 前掲書p.141-157)」と述べる。志水(1998)は、エスノグラフィックな研究は、いまだわが国では萌芽的な段階にあると言うが、この方法とそれに基づく研究の試みを、多様な形を保ってまます材として提示しているが、子どもの“異変”を読み解くうえで貴重な内容をもっている。
- 14) 岩田は「<コスモス>、つまり宇宙、つまり尽十方世界。それは自身の内的秩序をもち、美的調和をもっている生きた全体としての宇宙、あるいは人類のすみかであり、天と地をふくむこの無世界。」(岩田 1986)と定義する。アレクサンダー・フォン・フンボルトの理論を基礎とし、自らの文化人類学の成果をもとにして伝統文化とコスモスのモデルを構築している。すなわち、歴史的、伝統的な文化によって張りめぐらされた垣根から自由になって、発達の軸でなく文化・文明の軸を基にして子どもや子ども文化への接近を試みている。彼の構築したモデルは、<文化の内なるシステム>を中心に、最外側に<時間・空間のイメージ、その中間にくすわる、とぶ、まわるといふ動作>を置き、3つの動作の意味が内と外の空間との関連から解説され、全体の秩序のメカニズムが解明される。子どもの世界や文化のコスモロジーを構築際の有力なモデルとなり得る。
- 中村の「共振する世界」、河合の「子どもの宇宙」での子どもへの考えは、子ども論の先駆者である本田の「異化」や藤本の「子ども文化をコスモロジー」へ強い影響をあたえている。中村は、近代科学が切り捨てた「感性」「情念」「身体」を含めた総合体としての人間学を

志向しており、その意味で子どもの存在は彼にとり大きな関心事であった。彼の描くコスモスは、自分のまわりの世界に有機的な秩序とシンボリックな意味を与えた世界と考えることができ、子どもが描く世界を解釈するうえで重要な示唆を与えている。

河合は「子どもの宇宙」を明確に定義づけてはいない。ユング心理学の権威である河合は多くの臨床経験をまじえて、一人の子どものなかに宇宙が存在しているという前提を置き、それは、無限の広がりと深さをもつものであり、大人により無視され破壊される危険性をもつという。「子どもの宇宙」(河合 1987) では、子どもの宇宙の象徴的な事例を多く紹介して、子どもの存在を解釈するうえで子ども学へ大きな影響を与えた。

引用文献

- 安部 進 1961, 『現代子ども気質』 新評論。
- アリエス, Ph. 杉山光信・杉山恵美子訳 1980, 『<子供>の誕生』 みすず書房。
- 赤川 学 1993, 「差異をめぐる闘争—近代・子ども・ポルノグラフィ—」 中河伸俊・永井良和編著 『子どもというレトリック』 青弓社 pp. 163-200。
- 海老原修 1988, 「組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究」 体育・スポーツ社会学会編 道和書院 pp. 107-129。
- 海老原修 1991, 「スポーツ社会化における成果と課題」『体育・スポーツ社会学研究10』 道和書院 pp.153-171。
- Elizabeth, B. S. 1980, “Multivariate Considerations in Children’s Physical Education: Social Interaction”. Geographic Source, U. S. ; Kentucky.
- 藤本浩之輔 1974, 『子どもの遊び空間』 NHKブックス。
- 藤本浩之輔 1996, 『教育人類学と子ども文化—子ども文化のコスモロジー』 人文書院。
- 広田照幸 1998, 「<子どもの現在>をどうみるか」 日本教育社会学会編 『第63 特集 子どもを読みとく』 東洋館出版社 pp.
- 5-22
- 深谷昌志・深谷和子 1975, 『現代子ども論』 有斐閣双書。
- 古田足日 1996, 「児童文化とは何か」『日本児童文化史叢書7』 久山社。
- 古田足人 1989, 「児童文化」 日本子どもの本研究会編 『子どもの本と読書事典』 岩波書店。
- 本田和子 1974, 「保育現象としての詩的体験」 『人間現象としての保育研究』 光生館。
- 本田和子 1982, 『異文化としての子ども』 紀伊国屋書店。
- 本田和子 1983, 『子どもの領野から』 人文書院。
- 本田和子 1987, 「子どもからのメッセージ」 岩田慶治編 『世界の子ども文化』 創元社 pp. 67-79。
- 本田和子 1989, 『フィクションとしての子ども』 新曜社。
- 本田和子 1999, 『変貌する子どもの世界—子どもパワーの光と影』 中公新書。
- 本田和子 2000, 『子ども100年のエポック—「児童の世紀」から子どもの「権利条約」まで』 フレーベル館。
- 飯田吉晴 1991, 『子どもの民俗学—子どもはどこからきたのか』 ノマド叢書 新曜社。
- 石井直人 1986, 「異化—本田和子の仕事のことなど」『日本児童文学』9月号。
- 岩田慶治 1987, 『世界の子ども文化』 創元社。
- 岩田慶治 1995, 『岩田慶治著作集六卷—コスモスからの出発—一人の宇宙』 講談社。
- 影山 健 1987, 「子どもスポーツの問題点」 体育・スポーツ社会学会編 『体育・スポーツ社会学研究6—子どもスポーツを考える』 道和書院 pp. 1-26。
- 河合隼雄 1987, 『河合隼雄著作集6—子ども宇宙』 岩波書店。
- 片岡徳夫 1999, 「子ども社会をどうとらえるか」 子ども日本社会学会編 『いま、子ども社会に何が起こっているか』 北大路書房 pp.1-18。

- 門脇厚司 1995, 「社会化異変の諸相 なぜ、いま
少年少女の『異界』探索なのか」 門脇
厚司・宮台真司編 『「異界」を生きる少年
少女』 東洋館出版 pp. 3-23。
- 門脇厚司 1992, 『子どもと若者の〈異界〉』
東洋館出版。
- 柄谷行人 1980, 『日本近代文学の起源』 講談
社文芸文庫。
- 川勝泰介 2002, 「私の『児童文化』研究ことは
じめ」『研究誌 別冊 子どもの文化』
子ども文化研究所 pp. 3-12。
- 川勝泰介 1999, 『児童文化学研究序説』 千手
閣。
- 木下龍太郎 1975, 「遊びと子どもの発達」 大
田・岡本他編 大田・岡本他編『子どもの発
達と教育1 子どもの発達と現代社会』岩
波書店 pp. 129-151。
- 北本正章 1993, 『子ども観の社会史 近代イギ
リスの共同体, 家族, 子ども』 新曜社。
- 小浜逸朗 1987, 『方法としての子ども』 大和
書房。
- 松尾哲也・多々野秀雄・大谷善博・磯貝博久・船
越美津 1990, 「スポーツ競技者のバーン
アウトに関する実証的研究—スポーツ少年
団をめぐって—」 『日本体育学会第42回
大会号』 p. 127。
- 松澤員子編 2000, 『子どもの成長と環境 講座
人間と環境7』 昭和堂。
- 南 博文 1993, 「子どもたちの世界の変容 生
活と学校のあいだ」 無藤隆他編 『講座
発達心理学3 子どもの時代を生きる 幼
児から児童へ』 金子書房 pp. 1-26。
- 森 楸 1998, 「子ども研究の動向と課題」 日
本教育社会学会編 『教育社会学研究 第
63集』 東洋館出版 pp. 75-95。
- 中村哲也 1987, 「本田和子の子ども論」 『現
代と教育』 4月号 pp. 70-75。
- 中河伸俊・永井良和編著 1993, 『子どもという
レトリック 無垢の誘惑』 青弓社。
- 日本子ども社会学会編 1999, 『いま、子ども社
会に何がおこっているか』 北大路書房。
- 永島正紀 2002, 『スポーツ少年のメンタルサ
ポート 精神科医のカウンセリングノート
から』 講談社。
- 中村雄二郎 1991, 『感性の覚醒』 岩波書店。
- 大田 蕨・岡本夏木他編 1975, 大田・岡本他編
大田・岡本他編『子どもの発達と教育1
子どもの発達と現代社会』
- 大久保康夫訳 1980, 『ロリータ』 新潮文庫。
ポストマン, N. 小柴一訳 1985, 『子どもは
もういない』 新樹社。
- P. L. バーガー・T. ラックマン著 山口節夫訳
1977, 『日常世界の構成』 新曜社。
- 斎藤次郎 1975, 『子ども達の現在』 風媒社。
斎藤次郎 1998, 『「子ども」の消滅』 雲母書
房。
- 坂本忠芳 1979, 「視聴覚文化と子どもの発達テ
レビとマンガを中心に」 大田暁, 岡本夏
木他編 前掲書 pp. 108-129。
- 杉本厚夫 1983, 「ジュニアスポーツ強化選手に
おけるアンビバラント空間のパターン化
—逸脱行動へのアプローチ—」 体育・ス
ポーツ社会学会編 『体育・スポーツ社会
学研究2』 道和書院 pp. 135-154。
- 寺本 潔 1988, 『子ども世界の地図 秘密基
地, 子ども道, お化け屋敷の織りなる空
間』 黎明書房。
- ウーン, M. 平賀悦子訳 1981, 『子ども時代
を失った子どもたち』 サイマル出版協
会。
- 鶴野裕介 1996, 「藤本浩之輔先生の『子どもの
コスモロジー論』の構想」 藤本浩之輔編
『子どものコスモロジー』 人文書院
pp. 185-199。
- 鶴野裕介 1998, 「『子どもコスモロジー』の理
論」 日本子ども社会学会編 『子ども社
会研究』 ハーベスト社 pp. 3-17。
- 内海和夫 1987, 「がんばれスポーツ少年」 『少
年との対話②』 新日本出版。
- Volkwein, K. 1993, "Kids, sport, and Peril- An
information Dilemma", International Journal
of Physical Education, published and
edited, by Verlag Karlhofmann.
- 山口昌男 1976, 「文化記号論研究における「異

化」の概念」 『思想』 pp. 1440-1465。

山口昌男 1977, 『知の祝祭』 青土社。

山本清洋 1987, 「子どもスポーツに関する社会
化研究の現状と課題」 体育・スポーツ社
会学会編 『体育・スポーツ社会学研究
6』 道和書院 pp. 27-49。

山住正己 1979, 「文化の変容と子どもの発達」
大田・岡本他編 『前掲書』 pp. 96-
107。

吉田 毅 1994, 「スポーツ的社会化からみた
バーンアウト競技者の変容過程」 体育・
スポーツ社会学会編 『スポーツ社会学研
究 第2巻』 道和書院 pp. 67-80。